

「マン・レイと女性たち」展

Bunkamura ザ・ミュージアム(渋谷) 2021.07.13~09.06

「マン・レイ」(1890~1976)は20世紀を代表する写真家、美術家、映画監督、シュルレアリスム(超現実主義)の詩人などの万能の芸術家で、親しい女性たちをモデルにして、写真ではときに優しく甘美で、ときに強く自立的で、ときには神々しいまでに美しい女性像を生み出したことで知られている。

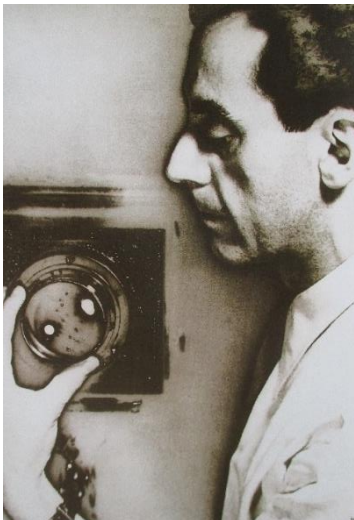
本展では、さまざまな愛と別れ、知的な発見や考察、冒険や遊びを体験していく時間軸を経(たて)糸に、その時々々のミューズとなった「女性たち」を緯(ヨコ)糸にして、親密で詩的で機知に富んだ作品世界を繰り広げていった「約150点の写真」を中心にして、絵画やオブジェなどを加えた約「250点」を超える作品を展観する企画である。

マン・レイ 《寝る女(ソラリゼーション)》1929年ゼラチン・シルバークラウドプリント



写真家としては、ひたすら女性を追い続けることにより、かつてない奥深い感応性を引き出すような作品を生み出して、写真一枚一枚が愛の日記を形作っていて、レンズはある種の女性美を新たに作り出していることが特徴とされている。

マン・レイ 《セルフ・ポートレート》 1932年ゼラチン・シルバークラウドプリント



マン・レイの作品には「セルフ・ポートレート」(自画像・自写像)の作品が多いのは、いつも自己を問い続けていた彼にとって、自画像・自写像は必要不可欠な表現領域であったためとされる。特に写真による《セルフ・ポートレート》の数々は、各時代の心情と精神のあり方を示していて興味ぶかい。

いつも鋭い目つきで笑顔を見せずに、ユーモアとアイロニー(風刺)を含む自己演出をしているところが独特である。油彩やデッサンに版画のほか、オブジェや彫刻による「セルフ・ポートレート」も数が多いが、彼にとっては「セルフ=自分自身」とは、

たえず繰り返すべきモチーフであった。